

「神に栄光・地に平和」

ルカによる福音書 2:8-16

みなさん、クリスマスおめでとうございます。クリスマスは、すべての民に与えられる大きな喜びの出来事です。世界の全ての人の救いのために、神はその独り子イエスキリストをお与えになったのです。この御子の降誕の喜びの知らせが、最初にもたらされたのは、王様や貴族ではなく、当時の祭司長や律法学者でもなく、ごく普通の貧しい「羊飼」たちでした。この羊飼いたちは、当時の社会では、「地の民」(アム・ハーアレッツ)と呼ばれる最も身分の低い人々とみなされていました。彼らは、昼も夜も一日中、羊の群れの中で羊と共に寝起きして生活していましたから、衣服は泥と汗にまみれ、体中に羊の匂いがしみ込んでいて、町の人たちから嫌われ、町には住めない人たちでした。

そのためでしょうか、ローマの皇帝アウグストゥスの勅令で、全領土の住民に登録せよとの勅令が出された時、全住民がそれぞれの本籍地に帰って登録しなければならなかったのに、この羊飼いたちは、平原で羊の群れの世話をしていたのです。この登録は、あの臨月を迎えていた身重のマリアでさえ、ガリラヤのナザレから、ユダのベツレヘムまで歩いて5日もかかる道のりを旅しなければならないほど、厳しい徹底した登録であったのに、彼らだけは対象外だったようです。羊のそばを離れられないという制約もあったかもしれませんが、住民として扱われない「アウトカースト」だったのではないかと思われます。人間として扱われていなかったのです。今、世界の各地で貧しさや紛争・迫害などで住むところを追われ、行き場を失っている「難民」の人たちのことが問題になっています。日本でも、原発事故による放射能汚染のため、郷里に帰れず、仮設の避難所を追い立てられている人々のことで心を痛めています。当時の羊飼いたちも、安住の地を持たない「居場所」のない人々だったのです。

そういう彼らが、今日のような寒い夜、ベツレヘムの郊外の荒野で、野宿して、羊の群れの番をしていたのです。町の人々が暖かな布団の中で気持ちよく眠っている時にも、彼らは寒さに震えながら、真っ暗な闇の中で、睡魔と闘いながら見張っていなければならなかったのです。オオカミなどの獣や盗賊から羊たちを守るためです。もしオオカミや盗賊が襲ってきたら、彼らは命がけて闘わなければなりません。それは実に厳しい労働でした。またそれは、他人には理解してもらえないような、寂しい孤独な闘いでした。

そのような彼らに、突然天からまばゆい光がさして、神の使いが現れ、彼らに告げたのです。「恐れるな。わたしは民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日、ダビデ

の町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである」と。羊飼いたちは、どんなに驚き、また恐れたことでしょうか。真っ暗闇の中で、突然天からの光を浴び、み使いの声を聞いただけでも大きな驚きなのに、「民全体」(世界のすべての民)に与えられる大きな喜びのおとずれ、救い主降誕の知らせが、告げられたのです。それは、全く思いもよらないことでした。彼らは、恐れおののきました。

町の皆から、汚いとか臭いと言われて嫌われ、無視されている自分たちに、なぜ神さまは、こんな大事な喜びの知らせを自分たちに告げられたのか？ 彼らは何よりもそのことに驚き、恐れたのです。ここに、神さまの選びの不思議さがあるのです。

使徒パウロは、コリントの信徒への手紙(1)の中で、「神は、知恵のある者に恥をかかせるため、世の無学な者を選び、力ある者に恥をかかせるため、世の無力な者を選ばれました。また、神は地位のある者を無力な者とするため、世の無に等しい者、身分の卑しい者や見下げられている者を選ばれたのです」(1:26-28)と述べています。この言葉の背後には、パウロ自身の体験があります。パウロはかつて、キリスト教の迫害者でした。キリスト教徒を捕らえ迫害の息をはずませてダマスコまで追い詰めていった時、彼もまた天からの光に打たれ、あまりのまぶしさに失明し、暗闇の中で主の御声を聞いたのです「サウロ、サウロなぜわたしを迫害するのか」と。そのような恐れとおののきの中で、やがて彼の目からうろこのようなものが落ち、彼は今まで迫害してきたイエス・キリストを述べ伝える伝道者に生まれ変わったのです。パウロはそのような神の選びの不思議さをしみじみと語ったのです。

天からの光と、救い主降誕のおとずれを聞いた羊飼いたちの思いも同じではなかったでしょうか。神さまは、無力で貧しく、いと小さき者をあえて選び用いて、大きな御業をなさるのです。

天の使いは、驚いている羊飼いたちに、さらに言われました。「あなた方は、布にくるまって飼葉桶に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである」。「飼葉桶」とは牛や馬、ロバなどの家畜の餌箱です。動物のよだれなどで汚れて黒光りしているような桶です。そんな動物の餌箱に、救い主が宿られたとは！ しかも、それが「救い主」のしるしとは！ 羊飼いたちは、とても信じられない思いであったと思います。世界の救い主なら、王宮か立派な御殿の中で、黄金のベッドにやわらかい羽毛布団にでも包まれているのでは？ とだれしも想像するところです。

羊飼いたちが不思議に思っていると、天の使いに天の大群が加わり、神を賛美したというのです。「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ」と。御子の降誕を祝っての天の大合唱です。羊飼いたちは、深い感動に包まれて、「さあベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか」

と、急いで町に入り、マリアとヨセフ、また飼い葉桶に寝かされている乳飲み子を探し当て、拝んだのです。

御子の降誕が、人通りの多い日中だったら、羊飼いたちはとても町には入れなかったことでしょう。その場所が王宮や立派な御殿だったら、守衛に追い返されて、近づくことさえできなかったことでしょう。そこが町はずれの貧しい家畜小屋の中であったからこそ、彼らは妨げられず、安心して訪ねることが出来たのです。彼らはその家畜小屋に入るなり、思ったことでしょう、ここは自分たちが寝起きしている場所と同じだ!と。家畜の種類は違っても、同じような動物の匂い、糞尿にまみれた地面、汚れた餌箱…。そしてその餌箱の中に、み使いが告げた通り、赤ちゃんのイエスさまが、ぼろ切れに包まれて寝かされているではありませんか。羊飼いたちは、なにもかも、み使いたちの言われた通りだったことに驚き、「この子こそ、わたしたちを救うためにこの世に來られた、まことの救い主だ」と確信し、大きな喜びに満たされたのです。彼らには、獻げるべき何物もありませんでしたが、心からの感謝の祈りを捧げ、急いで羊の群れのもとに帰り、仲間や多くの人々にこの驚くべき出来事を伝えたのです。

この羊飼いを通して宣べ伝えられたイエス・キリストの降誕の様子が、こうして今日に至るまで述べ伝えられ、世界中の人々に知れ渡り、すべての人々に生きる喜びと希望を与え続けているのです。

「神に栄光、地に平和!」。御子イエス・キリストは今宵、ご自身の生と死を通して、神の栄光を現わし、この地に平和をもたらすために、私たちのもとに來られたのです。

この世の悪しき力を追い払い、弱く貧しい者を顧み、武力によらない、愛と和解による平和をもたらすためです。飼い葉桶に宿られた主イエス・キリストを、一人一人、心の深みにお迎えし、私たちも、神の栄光を現わし、この地に御心に適った平和を造り出すために、共に励みたいと願います。

アーメン